

林彪、陳伯達、劉少奇などといった「現代中国の孔子」を批判し、これら「尊孔派」の反動的役割を糾弾するというたてまえで、去る八月の中国共産党第十回全国代表大会(十全大会)直前から開始された中国の「孔子批判・秦始皇評価」のキャンペーンは、ますます激しいトーンで高まってきている。

その様相は、あたかも文化大革命初期のころを思わせるものがある、注目されるのは、最近その重点が、孔子批判よりもむしろ、秦始皇礼

機関紙「紅旗」に掲載された二つの重要論文はとくに注目されなければならないだろう。すなわち、石侖の「尊儒反法を論ず」(一九七三年・第十号)、および羅思鼎の「秦王朝設立過程での復辟と反復辟の闘争——あわせて儒法論争の社会的基礎を論ず」(同・十一号)の二つの論文である。

るためだけのものなのかどうか——ということである。
果たしてそのためにだけ、これほど大がかりにキャンペーンが展開されているとは思われないのである。

●外交時評

孔子・始皇帝・現代中国

中嶋嶺雄(東京外国語大学助教授)



賛に置かれているようにみられることである。



すなわち、秦王朝内部にもぐり込んだ儒生たちと、始皇帝がサポートした法家の賢者たちとの闘争、いわゆる復辟(ふくへき)と反復辟との闘争に力点が移ってきたようであり、反動的な儒生どもは、先進的な秦王朝を内部からくつがえして、奴隷制への復辟をはかろうとした——と糾弾されているのである。

そしてこの場合、たとえば最近の中国共産党

ちはたくみに「世論をつくりあげ、郡県制を攻撃した」と強調して、今日の中国内部における「二つの路線の闘争」に、それを結びつけている。

とにかく、「孔子批判・始皇帝評価」のいずれの論文も、「現代中国の孔子」を糾弾することの重要性を指摘するとともに、革命の成果を台無しにしてしまう「現代中国の儒生たち」をあばき出すべきことを力説している。それだけに、今回の一連のキャンペーンが、ただ単に

林彪批判と整風運動(「批林整風」)を深化させ

ここまで述べてくると、十全大会をめぐる「潮流と反潮流」の角逐や、林彪異変以来ますます顕著になった「脱・文革」の潮流との関連で、今回のキャンペーンが「政府機関・文化部門」に大きな地位を占めている周恩来路線への、「王朝派」の激しい抵抗と批判ではないかという推測が、論理的にも整合してくることは否めない。

しかも、林彪異変に関連した「陰謀計画の書」として公式に流布されている「八五七一工程」の「紀要」が、しばしば一連の論文で言及されている。

この「紀要」には周知のように、毛沢東主席を秦始皇同様の「専制暴君」だとなじた文章があるだけに、「王朝派」としては、そのような始皇帝像を全面的に転換させる必要を、さしそまって感じているのではなからうか。

いずれにしても、「孔子批判・秦始皇評価」のキャンペーンの今後の展開とその方向については、大いに注目していかなければならないだろう。